



第 8 号

2017年
12月25日発行

学問への思い

柳田 忠則

学園紛争の嵐が全国に吹き荒れ、我母校も例外ではなかった。四年になると校舎は閉鎖され、成東での疎開授業。卒業式もないまま、いつの間にか同級生と離れ離れになり一抹の寂しさだけが残った。あれから半世紀になろうとしている。

当時、心身ともに疲れ果てていたが、卒業論文に取りかからなければならぬ状況だった。三年頃に漠然と伊勢物語を取り上げようと考えていた。それは、所属していた中古物語文学研究会で伊勢物語を講読し興味をもったことが一因である。しかし、伊勢物語の何を対象とするかは決めかねていた。そんな三年のある日、古書店で偶然にも「泉州本伊勢物語」の翻刻本を購入した。解説によると原本は戦災で焼失したという。この本には流布本にない章段が含まれ、本文にも多くの異同が見られた。これらのことに興味を誘われ、卒業論文は泉州本伊勢物語の本文に決めたのである。それからは資料収集と本文の校合の日々が続いた。ところが、四年になると学園紛争は激しくなり、研究は停滞し悪戦苦闘しながら「泉州本伊勢物語の本文研究」という題目で卒業論文を提出することができた。

これを機に伊勢物語異本への興味が湧き、大学院に進学した。在学中、日本大学図書館（当時）所蔵の新資料の伊勢物語の異本に出逢うという幸運に恵まれた。それは紛れもなく神宮文庫本系統の一本で、この系統の伝本はこれまで神宮文庫本を含め、谷森本、阿波国文庫本の三本が知られていたが、調査してみると、これらの中では最善本であった。修士論文「伊勢物語異本研究―塗籠本を中心にして―」の一章に加え、また「語文」三十四輯（昭和46・3）に掲載することができた。このことはさらなる研究への意欲をかきたてた。

大学院を修了し、高等学校に勤務することになった。新天地を得て教育と研究を両立させようと意気込んでいたが、理想と現実はあまりにも隔たっていた。焦燥にかられる日々を送っていたが、これを克服するには自分を信じて前に進む以外に道はなかった。そのために学会に出席したり、発表したり、時には神田の古書店巡りなどをした。こうすることで学問への刺激を得ることができたのである。そしてそれを今後の自分の研究の糧にしていた。こうして勤務の合間をぬって、為氏本をはじめ、為相本、通具本といった異本の研究を進めていった。そしてこれらに未発表のものを加え、『伊勢物語異本に関する研究』（桜楓社 昭和58・4）と題して上梓することができた。伊勢物語異本研究を志して十五年目のことである。

それにしても不思議なものである。あの古書店で「泉州本伊勢物語」に出逢っていなかったならば、今の自分の研究はなかったと言っても過言ではない。その後、私は大和物語、唐物語等の研究に視野を広げることができたのも、学問への思いが心の支えになっていたからである。

「元商学部教授」

OB・OGだより

私の礎

伊藤 拓

平成十年に国文学科を卒業、同十三年に大学院国文学専攻を修了しているので、研究室を離れてからすでに十五年以上も経過しています。思い返せば、あつという間の学生生活でした。

教師になるために国文学科に入ったものの、怠惰な生活のせいで、その目標すら見失っていた時期もありました。そんな時、高校時代の恩師から、教師になるのであれば専門の引き出しの多さが必要不可欠だから、大学院に進学して勉強を続けてみてはどうか、とアドバイスを受け、ようやく必死に勉強を始めたのでした。

そんなスロースターターの私でしたが、佐藤武義先生や同じ専攻の鈴木功真先輩にビビシシごいていただき、大変楽しくも充実した毎日を過ごすことができました。

その後、縁あって東京都市大学付属中学・高等学校で教壇に立つことになりました。

毎日、担任業務や授業・部活に悪戦苦闘の連続ですが、生徒の成長の一瞬に立ち会えることに、無上の喜びを覚えるようになってきました。たとえば、部活の引退試合で負け、涙を流しながら後輩に勝利への思いを託している生徒たちの姿を見たりすると、この仕事に巡り合えて良かった、とつくづく思うのです。同時に、教師としての礎になっているのは、やはり研究室で過ごした日々だったことも実感します。

もし、教師への志望を持ちながらも、諦めかけている人がいましたら、ぜひ勇気を出して一歩踏み出すことをお勧めします。

〔平成10年国文学科卒業〕

私の挑戦は続く

伊藤 由珠

国文学科への入学は、当時の私にとって大きな挑戦でした。日本語教師を目指し、日本語教育関連の勉強をしていた私は、日本の文化や伝統についても学びたいと思うようになり、学びの多様な選択肢に惹かれ、日本大学通信教育部への入学を決めました。しかしながら、私はそれまで文学作品な

どあまり読んだことがなく、文章を書くことも苦手でした。それなのに卒業論文の提出が必須な国文学科へ、勢いだけで入学してしまい、当初は卒業までの道程がとても長く感じられたものでした。

ところが、実際に始まってみると、学生生活はあつという間でした。また、とても有意義なものでした。背景の異なる様々な学友とスクーリングで出会い、たくさん刺激をもらいました。卒業論文には、案の定苦戦しましたが、なかなか進められない私を、先生方は根気よく見守りご指導してくださいました。私が無事に卒業できたのは、学生生活でお世話になった、たくさんの方々のおかげです。

現在私は、主人の仕事の都合により台湾にいます。折角の機会なので、今は毎日中国語のレッスンに通い、日本語には無い発音や、四声といわれる声調に苦戦しながらも、新しい言語の習得に挑戦しています。

台湾の生活にも少しずつ慣れてきました。が、年末にはアメリカへ赴任する予定なので、また新しい生活が始まります。日々の感謝を忘れずに、これからも新たな挑戦を続けていきたいと思っています。

〔平成29年文学専攻（国文学）卒業〕

わたしの仕事

大学職員



小林佳奈子 平成十四年三月、国文学科卒業。同年四月、日本大学職員として採用され、法学部へ配属となる。担当職務、私学共済事務（健康保険や年金）。趣味、食べ歩き。

大学受験の際に、文学部を選んだのは、教養学部のような意味合いの強さを感じ、文学部の大樹の下、国文学科という大きな幹の中であれば、どのような方向性にも対応できると考えたからでした。

国文学科で学んだことは、何事も一つ一つ積み重ねていくことの重要性についてです。どんな研究も根拠となるものがなければ、単なる思いつきにとどまります。根拠を積み重ねて初めて、その根拠から導き出された結論を述べることができるのです。

就職活動では、事務職を念頭において、印刷から化学、食品、物流、電機と様々な業種を選択肢に入れました。どんな企業にも「支える立場」の人はいて、様々な事務職が存在するからです。大学職員については、就職指導課の行う模擬面接等に参加する中で採用のあることを知り、選考に臨みました。

大学職員というと教務課や学生課の印象が強いと思います。しかし、大学という組織の中には「勤務する教職員を支える部署」も「施設を維持する部署」もあり、大学以外の勤務先には幼稚園から高校、さらに病院まであります。参考までに私の職務を具体的に示すと、次のようになります。

- ・給与―控除準備及び資料確認
- ・決算資料作成
- ・労働保険料（雇用・労災）算出
- ・大学法人基礎調査作成
- ・マイナンバー―提供依頼送付準備
- ・夏季賞与―控除準備及び資料確認
- ・健康診断関係調査作成
- ・来年度予算基礎資料作成
- ・メンタルヘルスチェック実施
- ・年末調整―資料提出依頼及び資料確認
- ・年末賞与―控除準備及び資料確認
- ・年度末退職者―本人へ各種届出の説明
- ・入学試験係員―入学手続者用郵送準備係員
- ・健康診断―受診予約取りまとめ
- ・卒業式係員

これらは年間業務のほんの一部です。世界の中、日本の中、一企業の中、自分にできることは限られているけれど、自分の行う一つ一つの言動が社会を作り上げているのです。その中で自分が行いたいことの共通項は何でしょう。それが見出せれば、どんな仕事にも、その共通項が必ず含まれているはずですよ。たとえば、すぐに実行できなくても、「あるべき姿」を考え、一つ一つ積み重ねていくことが大切だと現在も感じています。

談話室

二十四年ぶりの東京

西山 秀人

平成二十九年四月に本学商学部に着任し、総合教育科目の文学や文章表現等を担当しています。例えば、国文学科助手の任期を終え、長野県下の短期大学に赴任したのが平成五年四月ですから、東京で暮らすのは二十四年ぶり、ちょうど干支二回りの歳月が流れたこととなります。着任当初は勝手が分からずおたおたすることばかりでしたが、後期に入ってようやく自分のペースで仕事ができるようになりました。

専攻は平安時代の和歌文学、とくに十世紀前後の歌人詠を研究対象としています。学部二年の時に履修した杉谷寿郎先生の「国文学基礎演習」で、『古今集』を読んでいるうちに和歌文学の面白さに開眼したことが、全ての始まりだといってもよいでしょう。卒業論文では「双六盤歌」等のカリグラムに惹かれて源順の歌風研究に挑みましたが、今考えると若気の至りでした。

当時は私家集はもとより、勅撰集ですら古今・新古今以外はまとまった注釈が刊行されておらず、和歌の読解には本当に苦労しました。例えば、『順集』には「露を重みたえぬばかりの青柳は幾目掛けたる黄金なるらむ」(二八九)という屏風歌が収められています。なぜ下句で唐突に「黄金」が出てくるのか、最初のうちは一首の趣向が全く理解できませんでした。今のようにデータベースなどない時代、手探り状態で諸資料を博搜し、ようやく「あふばかりなくてのみふる我が恋を人目に掛けることのわびしさ」(後撰集・一〇一八)、「掛けつれば千々の黄金も数知りぬなぞ我が恋のあふばかりなき」(古今六帖・三四四／寛平御時后宮歌合)の類例を探し出しました。

これら先蹤歌をあわせ読むことによって、順の歌は副助詞「ばかり」に「秤」を掛け、なおかつ目方を表す単位である「目」に、柳の「芽」を響かせていることが判明。「葉に置いた露の重みで、今にも折れそうなほどたわんでいる棹秤のような柳の枝は、いったいどれほどの重さの黄金を掛けているのだろうか」と言語遊戯に興じたところに、この歌の眼目があるのだと納得しました。それにしてもアバンギャルドな趣向です。

五年ほど前、『和歌文学大系52 三十六歌仙集(二)』(明治書院 二〇一二)で『順集』の全歌注釈を担当したのですが、とにかく分からない歌ばかりで、もうお手上げだと保留にしまったものも少なくありません。近い将来、改めて全訳注に取り組んでみたいと思っています。

現在、商学部の授業では『百人一首』をはじめとする和歌文学のほか、『源氏物語』『枕草子』『土佐日記』『更級日記』などの散文作品も取り上げています。『枕』については学部時代に「枕草子研究会」に入っていたこともあり、院生時代には『語文』に拙論二編を発表することができました。短大では地域連携の一環として、市民講座や研修会等で『源氏』を担当するようになり、苦勞しながらもシニアの方々と一緒に読み進めてきました。近年、『源氏』の和歌に関する拙論を発表する機会に恵まれましたが、源氏読みの素人がまがりなりにも二編の論文をものし得たのは、こうした経験に助けられてのことだと思っています。

諸先生方から賜った貴重な学恩を、一日も早く本学で活かせるよう、日々研究・教育に精進して参ります。

「商学部教員」

もうひとつのあとがき

『おかしいぞ! 国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』

(笠間書院 2016年 2,500円)

梶川 信行



当初は、こんな過激なタイトルにするつもりはなかった。何せ上代文学会という学会の研究叢書の一冊として出発したからである。しかし、書肆の勧めもあって、広く一般の方々に読んでいただくために、各論文は読みやすい形に編集の手が入り、研究叢書に似つかわしくない廉価となり、過激なタイトルとなった。

しかし、このタイトルはやはり効果があったのかも知れない。発売前から広告を見て、書肆に注文が入ったとのことだから。その第一号の購入者と自称する佐渡のご老人から長い手紙をいただいた。それには、待ち望んでいた書物であると、熱い思いが綴られていた。佐渡で教員として過ごし、現在は地元の万葉勉強会の中心として活躍されている方のような。常々教科書の万葉歌には、何となく違和感を持っていたが、こういうことだったのかと納得したと言う。

また、関西の私立の小学校で古典を教えているという先生からも、長文の手紙をいただいた。従来の古典教育に疑問を感じ、子供たちが古典に親しめるように、さまざまな授業の工夫をし、その成果を本にもしたという方であった。本書の趣旨にはまったく同感であると、わざわざその本も送って下さった。

急遽、教材を差し替えた教科書会社があったという情報も入って来た。ある大学では、授業の教科書として使っているとも言う。ネット上にも、本書に対するさまざまな意見が見られる。

本書のサブタイトルにもあるように、国語教科書の

『万葉集』の単元には現在も古い常識が蔓延している。平成になって、全面的にカラー印刷となり、紙面は実にきれいになったが、内容は昭和のままである。否、平安時代以来の常識や昭和の戦時体制下のプロパガンダが姿を変えて生き残っている部分さえある。そうした現状は、そんなに簡単には変わらないだろうが、たとえ小さな風穴であっても、それを開けるための揺さぶりをかけたい。学会という看板を錦の御旗に仕立て、社会に訴えてみようとしたのが本書の刊行であった。

付属の国語の先生にも読んでもらおうと、付属高校に送ってみた。すると、夏休みに催される国語科の教員研修会で講演してほしいとの依頼が来た。高校の先生方に直接思いを伝えることは、望むところである。喜んで引き受けた。その時のコメントシートに書かれた感想はさまざまだったが、聴衆の中の教え子や後輩たちへ直接、私が不都合だと思っている教科書の現実について語ることができたのは、幸いであった。

その後、「読み」の授業研究会という団体が刊行している「国語授業の改革」というシリーズでも、とても好意的な形で取り上げられた。教科書の『万葉集』の不都合な実態に対する理解が、こうしてじわじわと広がって行った結果として、来るべき社会にふさわしい教材へと生まれ変わってほしいと願っている。

国文学会の会員の皆さん。特に国語の教員をしている皆さん。ぜひ読んで下さい。

〔国文学科教員〕



紅野ゼミ

(紅野謙介先生担当)

水曜5限

ついこの間、二年生のゼミ見学のときに、ゼミ幹事のひとりが紅野ゼミのいいところは何ですかと聞かれて、「まずは先生が紅野先生であること、ついでお酒をよく飲むこと」と答えていた。紅野先生であることがいいことかどうかは分からないけれど、授業のときに笑いが絶えないのはこのゼミの特色だ。なるべく気楽に、敷居を高くしないで、自分の感想や意見をいえる。やっぱり緊張はするけれど、発言して話がありあがればうれしくなるし、思いがけず題材のツボを押さえていたとなると舞い上がりもする。そういう雰囲気が生まれるところがこのゼミのいいところだと思う。

お酒を飲むことについては、前期のコンパが二回、ゼミ合宿の二日間はずづけて懇親会だったけど、後期はまだこれからという程度。ゼミ全体の公式コンパというのは言うほど多くないかもしれない。でも、学生たちは個別にゼミのあとに飲みに行つて

いる。ずっと前の先輩たちからの「伝統」らしく、歴代のT.Aの人たちがみんなで下高井戸駅前の「紅とん」に行ったとき、行ったあとの面白エピソードをさんざん話していた。卒論のこと、就活のこと、教育実習のこと、将来のこと、大学生も後半になる



夏合宿風景 (2017年9月8日 於・軽井沢)

と話したいことはたくさんある。学生時代の終わりが来ると思えば、いま話しておかなければならないことがもつともつとあるように感じる。けれども、だいたい飲んだ翌日には細かいことは忘れてしまう。

紅野先生は「大学院生が大事だ」と言う。

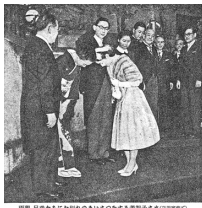
ゼミ出身の大学院生がたしかにT.Aをやっていることが多かったと聞いた。先輩がいるから、勉強をつづけることのイメージができるし、まだ同じ学年の人が大学院にいると思うから、つながりも続くのだろう。昨年の鈴木さんは同じT.Aでもだいぶ違っていた。学生を挑発することの方に力を入れて、先生にあまり発言させないようにしていた。あれはあれで面白かった。今年の徳本さんは学生と年齢差がだいぶあるけれど、それだけに落ち着いていて相談しやすい。同じ傾向、同じタイプばかりにならないようにしているのだと思う。

ゼミのテーマを書き忘れていた。もちろん近現代文学のゼミである。毎年、前期は四年生の卒業論文の計画発表が中心で、後期は三年生が特定の小説に取り組み発表を中心に行っている。今年はゼミ合宿で古井由吉の「祈りのように」という短篇をみんな読んで読んだが、グループに別れ、個々のテーマを決めてみんなで発表するめずらしい形式だった。ホワイトボードを使っていたいわゆる「アクティブラーニング」で、飲み続けの三日目の午前なのに誰も寝ない、無我夢中になった二時間だった。むずかしい小説がふと何かついた気になる瞬間があった。

国文学科ヒストリー⑧

1959年(昭和34年)

- 1月14日 南極昭和基地でタロとジロ犬生存確認
- 3月 9日 『朝日ジャーナル』創刊
- 3月17日 『少年マガジン』『少年サンデー』創刊
- 3月30日 『語文』第7輯刊行
- 4月 1日 東京都風俗営業等取締法施行条例施行
- 4月 1日 文理学部に独文学科設置
- 4月 1日 通信教育部が文理学部へ改組
- 4月10日 皇太子明仁親王ご成婚
- 4月15日 山田忠雄教授退職
- 4月20日 東海道新幹線起工式挙行
- 4月26日 巨人王貞治プロ入り第1号本塁打
- 5月25日 戦後初の国産潜水艦おやしお進水
- 5月26日 夏季オリンピック東京開催決定
- 6月 1日 日本光学工業「ニコンF」発売
- 6月21日 日本大学国文学会総会
- 6月25日 巨人長嶋茂雄天覧試合サヨナラ本塁打
- 8月 1日 日産自動車「ブルーバード」発売
- 9月26日 伊勢湾台風で甚大な被害
- 10月 3日 巨人5年連続セ・リーグ優勝
- 11月13日 学術研究発表会
- 11月19日 東京都に緑のおばさん登場
- 12月14日 北朝鮮への在日朝鮮人帰還事業開始



皇太子ご成婚を伝える『朝日新聞』4月10日付夕刊

おめでとう！
皇太子ご夫妻

お二人、ここに
逢頭の縁

拍手口笛の群

【国内外の動き】この年、皇太子明仁親王（今上天皇）と正田美智子様がご成婚。世の中が祝賀ムード一色につつまれた。4月10日のご成婚パレードがテレビ中継されたことから、受信契約数は前年倍増の二百万台を超えた。皇室の明るいニュースの反面、9月襲来の伊勢湾台風では、死者・行方不明者が五千人以上にも及び、明治以後最大の台風被害をもたらした。娯楽面では『朝日ジャーナル』『週刊現代』『週刊文春』の大衆週刊誌や『少年マガジン』『少年サンデー』の漫画週刊誌などが創刊され、娯楽のパロメーターともいえる週刊雑誌が相次いで世にお目見えした。

【学内外の動き】4月1日、文理学部は独文学科が設置された。さらに通信教育部の文学部が文理学部へ改組され、国文学専攻・英文学専攻・哲学専攻・史学専攻が設置された。6月21日に日本大学国文学会総会が開催され、①大伴家持の季節感・中川幸廣、②女殺油地獄の構造について・福田篤、③後撰集の素材とその撰集・杉谷寿郎、④延宝期における芭蕉の周辺・阿辻見知子、⑤後撰集の天智天皇歌一首をめぐって・岸上慎二の五氏による各研究発表の後、麻生磯次氏による「笑の意味」と題する講演が行われた。



桜麗祭で賑わう正門受付風景

キャンパス点描

平成29年度、桜麗祭は第25回を迎えた。11月初旬、例年どおりキャンパス内が賑わった。テーマは「Wake up Advance！」。訳して「目覚めて躍進せよ！」とのこと。かつて文理学部は学生運動の影響により、長期間、大学祭が見送られてきた。四半世紀以前に卒業の文理OB・OGたちは、大学祭を経験していない。今、25年が経過し、桜麗祭は学生の自治による実行委員会が運営する。学生が主体で開催される大学祭に隔世の感を覚える。今後も学生の活発な文化活動にエールを送りたい。

掲 示 板

国文学会短信

7月開催の日本大学国文学会大会において、現行の正会員・学生会員に対し、新たな会員資格として「同窓会員」を加えることが承認されました。これにて国文学会の中に同窓会組織が正式に位置づけられたこととなります。正会員との相違点は、同窓会員には学会誌『語文』の配付がないことのみ。現在『国文通信』の会報会員の皆さんは自動的に同窓会員へ移行します（手続き不要）。会費納入のシステムは会報会員の時と変わりません。今後『国文通信』は、国文学会の同窓会の機関誌として発行を続けてまいります。

国文学科短信

1号館1階にあった書道教室が2階西側へ移設され、後期から使われています。以前より広く明るくなり、水道設備も室内に付設され、便利になりました。この1号館は学部内で一番古い建物ですが、内部は教室単位でリノベーションが進められています。

文理学部短信

◆3号館の1階にファミリーマートが新規開店しました。朝から夕方までの営業とはいえ、学内初のコンビニエンスストアの出店ということで、おおむね好評のようです。

◆キャンパス整備が急ピッチで進行中です。写真は旧本館の解体作業の様子で、この後、中庭として整備・再生されます。撮影は7号館4階の国文学科助手室から、高橋優美穂さんによるもの。正面に3号館、左手に1号館と2号館（旧研究棟）が見えます。なお、5号館と6号館も同時進行で解体中です。



同窓会員募集のご案内（郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会）

国文学会では国文学科の卒業生（大学院・通信教育部を含む）を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円（2年分）から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第 8 号
2017年
12月25日発行

日本大学文理学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区松上3-25-40

紅野謙介・鈴木晴彦・竹下義人
国文通信編集委員会

◆第8号をお届けする。ご寄稿くださった皆様へ、心より御礼を申しあげる。◆掲示板に報じられたとおり、文理キャンパス内は、現下、改築建てかえ工事の真っ最中。工期完了の来夏、キャンパスは大きく変貌を遂げるにちがいない。◆すでに新本館落成にともない、今年4月より教授会の開催は新本館地下のセンターホールにて始動。さらに9月からは、ペーパーレス会議が導入された。当初、紙無しに面食らったものの、これもキャンパス変貌の余波と言いかせ、流れに身をまかすほかあるまい。◆今号より紅野先生が編集委員にご就任。（晴）

編集後記

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。
電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。